お詫びからはじめた通信票（レスポンス・ペーパー）

肥田　嘉文
環境生態学科

1．はじめに

授業が苦手である（話が下手だ）。そのような自分が本特集で文章を書く意義があるとすれば、それは、下手な人も何だかんだと教員をやっている、という記録を残すことかと思う。

こういう自覚がある私の授業に対する心境は複雑である。例えば、夏季休業明けの後期授業が始まって間もない昨年 10 月、知人と話していて「9 月の終わり頃は気が重かったんですけど、授業が始まると休みの時より元気になっているんですよね。」と、その時の気持ちを口にしていた。そうかと思うと、今年 1 月の大雪の朝、人一人が歩ける程しかない踏み固めた雪道を歩いて大学へ向かおうとすると、正面からこちらに歩いてくる学科 1 回生の 2 人に会い、午前中の休講の知らせがあったことを聞いて、（とても口には出せなかったが）急に心持ちは軽くなったのだった・・。（いきなり脱線するが、今年の大雪で、声をかけ合って歩く人の表情や、スコップを手に多弁になって交わす会話が、とても温かに感じられた。）

そんな心境でありながら、やはり、自分がこれまで知り得た、大切と思う事柄を学生に向けて伝えたいという基本的欲求がある。苦手なくせに話したいことがある、という関係になっている。そういう、自分の伝達欲のようなものを再確認させてくれるのが、私が授業で学生に書いてもらっている「講義内容に関する通信票」（レスポンス・ペーパー）を通じた、学生とのやり取りである。

2. 通信票の始まり

助手として採用された私は、半期通しての授業を担当するようになる前、2 コマだけのゲストとして担当を任されていた授業があった。当初は毒性学の教科書的なことの解説に続いて、環境科学の研究分野での自分の出発点である「環境ホルモン（内分泌かく乱物質）」のテーマについて話す、という内容だった。そして研究する中で、この研究が世の中のどういう役に立つのか、どの程度の影響をもつ問題なのかと考え、悩むようになっていた。そんなとき、ゲストを任せてくれた当時の上司から一冊の本を紹介してもらった。それは「個人下水道（合併式浄化槽）」という、水を使い捨てるのではなく少し汚れた水を循環させて使おう、というシステムについて書かれた本だった。その著者が中西準子氏であり、これが、環境リスク学、つまり影響の大きさをあらわす考え方との出会いになった。影響の大きさを知りたいのは、ものごとが持つ両面の折り合う中間の位置を見つけたいからである。わかりやすさとは対極にある、面倒くさい考え方である。そしてこの考え方は直接、私が伝える授業でのメッセージとなった。

まさに、自分が現在進行形で学んでいることを授業の内容にしていったのだが、教科書がないなか、さまざまな要素を含むこの考え方を、どのように構成して伝えていくか、いまも悩みは尽きない。そんな状態なので当時も、話題を盛り込みすぎ、話も拙く、とても伝わったとは思えなかった。そこで学生の質問や要望をちゃんと聞いてみたいと思った。それが、A4 判の半分の大きさの用紙「通信票」を授業の最後に学生に書いてもらう習慣のはじまりだった。

80 名ほどの学生からの視点や言葉は、本当にさまざまだったが、共通するものもあった。それらをテーマ別に分類して、伝えきれなかったお詫びの資料として、大部なプリント冊子「質問に対する回答」を作り、1 コマ分ずつ 2 冊にして返却した。このやり取りの過程は、まさに自分が学ばせてもらう場となった。学生から向けられた、ゆたかな感性の、率直な言葉に感化され、それに必死になって答えることで、理解が不十分な点に気づかせてもらった。読む本の量が増えたのも、この頃からだった。この体験を経て翌年度の 2007 年度から、初めて授業を一人で担当することになった。そして毎回、通信票を書いてもらうことにした。返答は、「通信票だより」と名づけて翌週に配布することにした。名称は小中学校のころの「学級だより」をイメージした。これまで毎週何とか続けてこられたのも、自分が対応できる 20 ～ 30 人のこぢんまりした受講人数であっ

たことが幸いしていると思う。

３．学生の思いを言葉にしてもらう

通信票を書いてもらうにあたり、学生には、「自分の考えや疑問などを、根拠とする知識との対比を意識して自分の言葉で表現して欲しい」と伝えている。

自分の考えを紙に書いて言葉にしてもらうという行為の意味を、大事に思っている。他の人の意見に引っ張られない効果もあるかと思う。記名して自分の意見を述べることにもなる。手書きの文字からは、学生の心境も伝わってくる。

よく、「みんなの文章をパソコンで打つのは大変じゃないですか？」と学生から言われる。しかし、その労力よりも、顔が浮かぶ筆跡の一つの文章を前にして、どう答えようか‥と考えあぐね、本を読み、書き始めるまで時に延々とすぎていく時間の方が多くを占めているように思う。

とはいえ、毎回興味深い反応（必ずしも真面目なものとは限らないが）をしてくれる学生が今回はどんなことを書いてくれただろうかと期待したり、授業中あまり反応がなかったけれどこんなに興味を持ってくれていたのかと後で知る楽しみもある。それが、またしっかり返答をしようという動機にもつながるように思う。効率は悪いのだろうが、自分にとっては想像力を促進される、怠け心を救ってくれる手段になっているとも思う。書き終えた達成感で、今回の講義準備の前に安堵してしまう困った面もあるのだが・・。

４．『通信票だより』を振り返って

今回、学生とのやり取りの記録を振り返ってみた。良いことを書きがちになるこのような場で、学生と緊張関係を持ちながら対している、自分の率直な感情を記しておきたい。学生は時に、思い込みで、学んだ初めての見方を受け入れられずに自分の価値観のみを書いてくることがある。そのようなときは、まずは自分がそれを受け止め、いろんな見方を身につける大切さが伝わるよう返答している。

まだゲストで話していた頃、「リスク評価なんて、いかにもアメリカらしい考え方だなと思った。（中略）多少は合理的でなくても仕方ないのではないだろうか。文化が違えば価値観も変わってくる。みんながアメリカみたいにはなれない。科学的理論に基づいて生活することが正しいとは限らないのではないか。」と書いた学生がいた。当時の私は、「よく考えて回答してくれていて、とてもうれしく読ませてもらいました。」と書き出して、リスク論について皆の理解を促したいという目標は持っているのですが、と前置きした上で次のように書いていた。「一方で、確かにぼくも『合理的』という言葉への嫌悪感というか、無条件に主張することを躊躇させる何かがあると感じているところがあります・・。どちらかというとぼくは、リスク論を大局的なものの見方に必要不可欠な『考え方』というように捉えている意識が強いような気がします。（後略）」読んで、こういう返答をしていたのかと感慨深かった。百科事典的な、学問的に正しい、精緻な数値計算に基づいた「リスク評価」の存在は欠かせない。しかし、それでこぼれる部分を補うような、例えるならある国語辞典の編纂者である飯間浩明氏の表現に重なる、ふだんの生活における『要するに何か』に答える（さらには新しい辞典のあり方を提案する）仕事、そういう方向性があるのではないかと研究に取り組んでいる、今の自分の意識につながるやり取りをしていたことに少し驚いた。

他に印象に残るのは、ゆっくり卒業していく５回生以上の学生の言葉である。はっと思わされることが多くある。含蓄があり、理解度が一段違う気がする。「特になし。」とひとこと書いて提出してきた学生もそういう一人だった。自分もダメだったなぁ‥と落ち込んで帰ってきて目にしたその言葉に、そうだよねぇと思いつつ、込められた気持ちに心が痛んだ。教員への気遣いをさせてしまったと感じる文面を多く見るときも、同じような思いに駆られる。そういうときは、講義担当の初年度に自分がコメントしていた、「自分の未熟さばかりが気になります‥。とにかく、一歩一歩ですね。」の心境で、気持ちを新たにすることにしている。

また課題として、継続しているうちに伝える事柄に対する自分の感度が鈍ってくる現実に対して、毎年新たに接する学生にとっては初めての体験になることを、常に意識することが大事だと感じている。

５．おわりに

よしもとばななさんがエッセイ集『すばらしい日々』に書いている。「気持ちは低め安定であんまり大きく動いていなかったから、淡々とした日々

だったと思っていた。でもこうしてふりかえるとなんとキラキラしているのだろう。きっと人生とはそういう宝物に満ちているのだろう。だからふりかえる時間はとても大切だ。」いただいた機会に感謝したい。

最後に。私は授業で伝えたいことを、新聞記事と組み合わせてよく資料にする。毎回の通信票だよりの最後にも「サザエさん」の漫画を一つ、新聞に掲載された日付入りで引用している。授業で扱っている 20 世紀の 100 年間における疾病の変遷と、昭和の時代背景を重ねて感じてもらえれば、との思いもあるが、これはもっと軽い気持ちからである。文庫本をかなりの数揃えた私だが、もう 5 年以上前、ある週末出勤してくるとドアの前に段ボール箱が置かれていた。中には「サザエさん」の発刊当時の単行本がほぼ全巻揃っていた。その頃の周囲の学生に少し聞いてはみたのだが、いまだに誰が置いて行ったのかわからない。しかし、私とサザエさんを結びつける、私の授業を受けてくれた学生か卒業生の仕業かと思うと、なんだか温かな心持ちになるのだった。